The TENDAI journal
天台ジャーナル
広報天台
令和4（2022）年10月1日土曜日
（毎月1日発行）1部50円（消費税込・送料別）

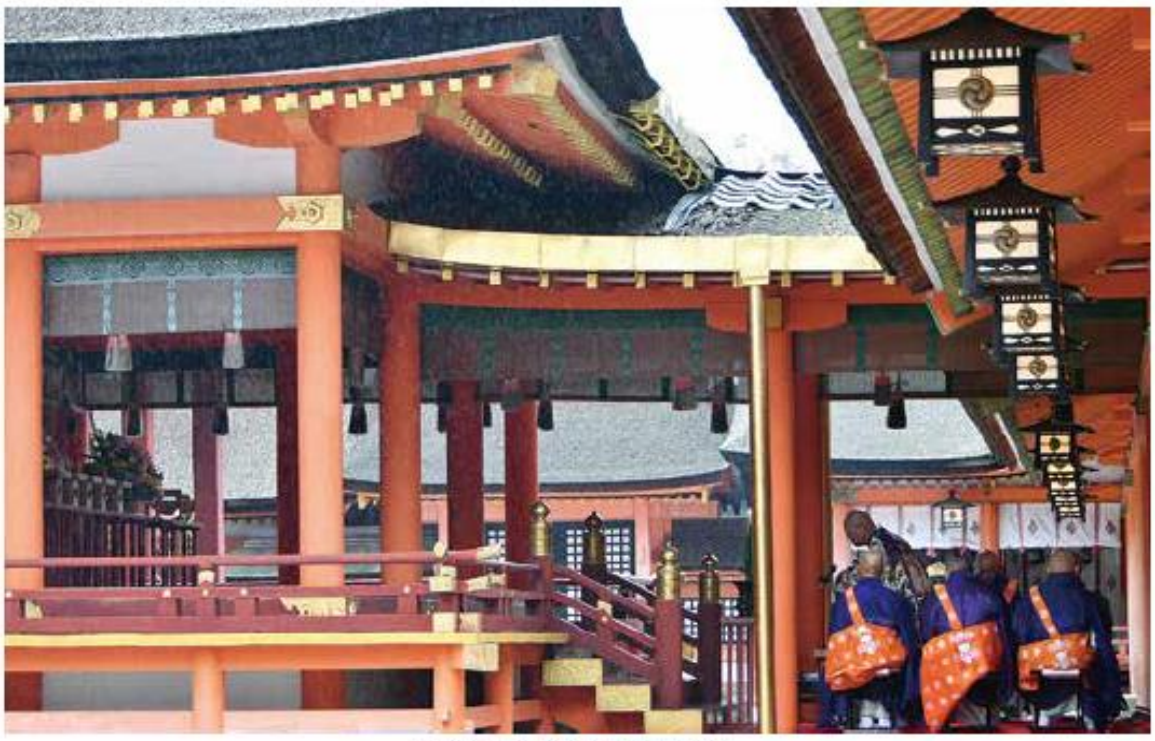
発行所：天台宗出版室
発行人：出版室長 小林 祖承
〒520-0113大津市坂本4-6-2
天台宗務庁内 電話：077-579-0022(代)
Eメール：T-Press@tendai.or.jp

伝教大師一千二百年大遠忌法要
宇佐神宮で『法華懺法』奉修 九州東教区

ご神恩に報謝し、宗祖の遺徳讃える

大分県の宇佐神宮において9月26日、九州東教区（安部暁昇宗務所長）主催で「伝教大師一千二百年大遠忌 法華懺法」が本殿で営まれた。伝教大師が入唐求法にあたり渡海の無事を祈願された八幡大神（宇佐八幡大菩薩）に神恩感謝を捧げ、宗祖の遺徳を讃えた。

宇佐神宮は八幡宮の総本社であり、天台宗との関係も深い。宗祖伝教大師が入唐求法の際に宇佐神宮で祈願し、帰国後にはその感謝を込め千手観音尊像と大般若経二部一千二百巻、法華経一千部八千巻を奉納、法華八講を修した。そして六所宝塔の一つ安南の宝塔を建立することを発願されている。また同宮に近い国東半島に点在する寺院は、宇佐八幡の生まれ変わりである仁聞菩薩が養老2年（718）に開基したと伝えられており、神仏習合の原点といわれる六郷満山を開いた。


厳かな読経が本殿に響く

それらの歴史的背景から明治期以前には、日常的に法華経が講じられてきたが、神仏分離、廃仏毀釈令により途絶えてしまう。しかし大正7年に一度、営まれたのを経て、昭和53年5月に復興。以来、九州東教区が毎年法華懺法を営み報恩感謝を捧げている。また10年毎に、天台座主猊下による『法華八講三問一答』法要が営まれており、最近では平成30年に森川宏映天台座主猊下がご親修された。

コロナ禍で3年ぶりとなった法要には、阿部昌宏天台宗宗務総長、水尾寂芳延暦寺執行を来賓に、調声（導師）の安部宗務所長、秋吉文隆教区顧問ら総勢25名の出仕並びに随喜僧侶らが神職とともに本殿までを参進。本殿で法要が営まれ、神前に玉串が奉奠された。

神職の先導で境内を参進

法要後、参集殿にて開催された記念式典で小野崇之宮司は「大神さまが悦ばれた清めの雨中での法要は、まさに神仏一如。天台宗の皆さまと更にご縁を深めたい」と感謝し、森川天台座主猊下との思い出にも触れられた。

阿部宗務総長は「今日の法要はお大師様の教えを次の世代に繋げていく取り組み。また能行能言で、我々僧侶が身をもって実行しながら檀信徒を教化していかねばならない。大遠忌を終えた今を新たな第一歩として行動して欲しい」と呼びかけた。また水尾延暦寺執行は、森川猊下がご親修のおり、随喜した檀信徒らに述べられたお言葉を紹介し挨拶に代えた。

この日は、平成21年に開宗千二百年慶讃大法会の円成を記念して教区が境内に建立した『伝教大師 安南豊前宝塔院顕彰碑』前で役員らが法楽を捧げた他、法要終了後には研修会を開催。水尾延暦寺執行による記念講演が行われた。

記念式典で次世代継承を誓う

極微（ごくみ）

日本の山は四季を通じて表情を変える。春には「山笑う」という。木々の芽吹きが紅色や黄色、緑色と色彩豊かな笑顔となる。この時期を過ぎるとやがて色彩も落ち着き、緑色が深くなる▼そうなると夏である。夏は「山滴る」だ。緑一色に覆われて連なる山々は、溢れるがごとき鮮やかさに彩られる▼やがて炎暑も過ぎ、山もいわば壮年期の趣に入る。春とは違った色の移ろいの季節に至る。「山粧う」季節。高い山から始まり、里に近い低山に至る紅葉のタペストリーが編まれる。山がもっとも美しい姿を見せるときだ▼さて、絢爛たる色彩で包まれていた姿が、時が経つに連れだんだんと生彩を失っていく。あれほど美しかった木々は徐々に枯葉を纏うようになり、いつの間にかそれも落ちて、茶色や灰色がかった姿に変貌する。常緑樹の緑以外は裸木となる。冬を迎えて山は「眠る」▼昔から同じ時期に同じような四季の移ろいを見せていた山々も、近頃は、少しづつ変わってきたようだ。温暖化による気候変動のせいか。特に目立つのが、紅葉のずれ込みである。昔ならば、12月には紅葉の見頃は終わっていたのに、まだ十分に見られる名所が出てきている。今後、秋だけではなく他の季節の山々の表情は変わって行くのだろう。急速な気候温暖化は、これからどんな山の顔を作っていくのだろうか。